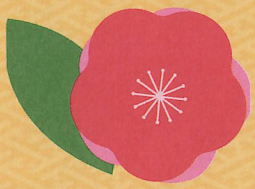
尾道茶園案内帖

遊びの空間を巡る

其の弐

・旧福井邸
・クジラ別館
・柳邸



茶園（さえん）とは？

真野洋介（東京工業大学）

1．茶園の起源とその始まり（江戸時代）

茶園とは、尾道独自の呼び方で、茶を楽しむ客をもてなすためにつくられた、近世豪商の別邸（別業とも呼ばれる）に起源を持つ、建築と庭園等を含めた環境の総称である。

江戸時代の中頃、芸州浅野藩御用商人富島家（天満屋）が延宝年間（1673～1680年）に、向島西富浜塩田脇（富浜新開）にしつらえた「烏崎園（海物園）」には、かつて伏見城の遺構を移築したと伝わる、古田織部好みの燕庵形式の茶席「露滴庵」（重要文化財）が設けられ[注1]、寛文年間（1661～72年）に造営が開始された松本家（泉屋）による加島園（尾道市向東町加島）と並び、最も古い時代につくられた茶園であった。いずれも「園」と名付けられているように、茶室や庵、庭園だけでなく、地形や周辺の風景と一体となった大規模な造営が行われた様子が史料[注2]に描かれている。

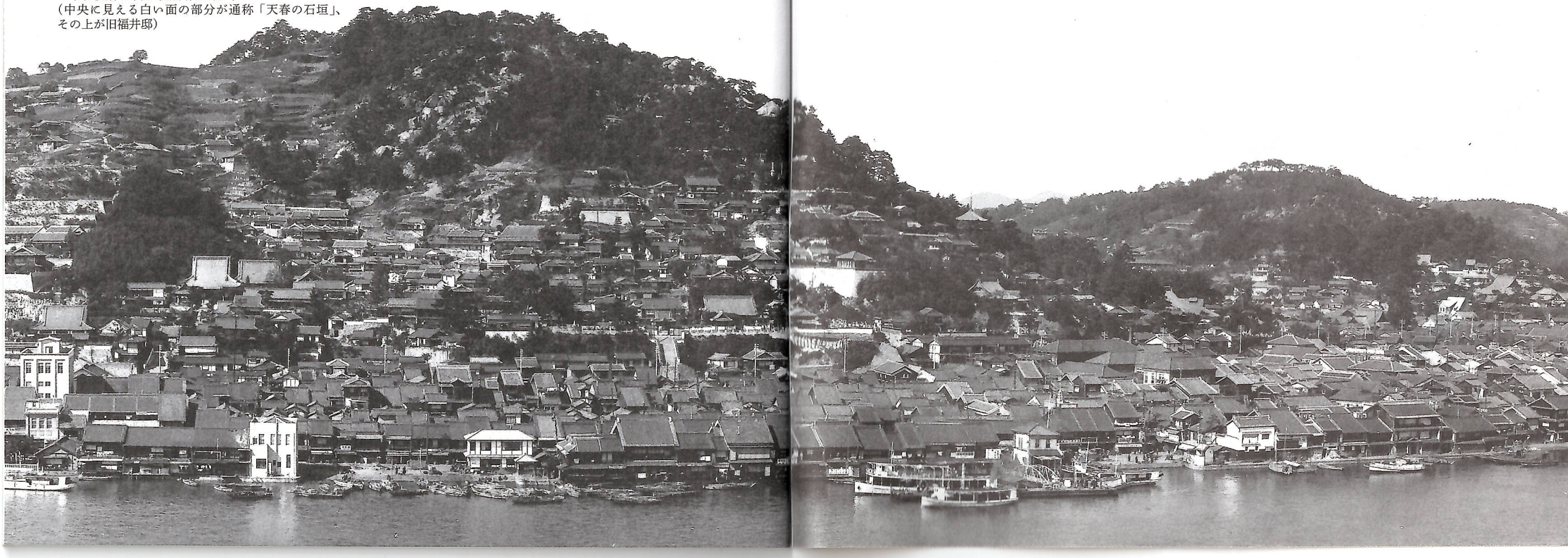
その後、宝暦年間（1751～62年）には熊谷家（金屋）による挹翠園（尾道市長江）、稲井家（川崎屋）による鳴子庵（尾道市久保川端）、文化文政年間には、江戸後期の豪商橋本家（加登灰屋）による爽籟軒（尾道市久保宮崎[注3]）などが続き、海上の小島や塩田開発地脇などの独立した環境から、歴史的市街地・尾道町の隣接地に立地が移った。幕末期には、島居家（住屋）により旧出雲藩屋敷跡に設けられた柳陰亭や、亀山家（油屋）の別荘（後の天野別邸）が、千光寺山麓の斜面地に立地するようになった。[注4]

これらの別荘と茶室には頼山陽、田能村竹田を始めとした文人墨客が迎えられたことが記されている。[文献6] このように、初期の茶園は町年寄など、限られた有力町人が営む文化サロンの役割が強かったと考えられる。

ところで、豪商の別荘が「茶園」と呼ばれるようになったのはいつ頃のことであろうか。現在確認できる資料のうち、「茶園」という文字が原資料から読み取れる最古のもののひとつは、橋本家文書の中にある「宮崎茶園と地面之図」と記された別荘の増改築の際つくられた図面[注5]である。もうひとつの資料は、江戸の俳人長谷川木海が文政2年（1819年）鳴子庵訪問の際、庭園を見て書き残した文章の中で、川崎屋稲井庄三郎が宝暦14年（1764年）、庭に松を植え歌碑を埋めたことに言及しており、そこに茶園という表記が見られる。[注6]

▲浄土寺庭園と露滴庵

▼昭和初期の千光寺南斜面と港町
（中央に見える白い面の部分が通称「天春の石垣」、その上が旧福井邸）



2．近代茶園の展開

（明治時代～昭和初期）

明治以降、茶園の建設は斜面地を中心に大きく展開されることとなった。これは、山陽鉄道開通の際の立ち退きに伴い、寺院所有の土地が多かった斜面地の宅地化が始まったことと、千光寺山に公園（共楽園）が開発され、石段の参道などと合わせて環境が整ってきたことなどが引き金となったと考えられる。江戸後期、数々の詩歌に詠まれた、千光寺山から尾道水道への眺めを楽しむ行為が、個々の別荘の私的な居住空間や庭園に取り込まれるようになったのである。また、西国街道、出雲街道の両街道筋にある店・本宅と斜面地・海岸沿いの茶園という、近接した立地環境により近代尾道の街が立体的に組み立てられていったことも尾道独自の環境形成と言える。この展開を2つの時期に分けて見てみよう。

第1期：明治初期から大正初期にかけての茶園

江戸末期、挹翠園に続く長江の山中につくられた庭園を活かした大藤忠兵衛邸（明治5年）、千光寺に上る新道造成とともに、通称「天春の石垣」と呼ばれる、美しい勾配の石垣上に設けられた天野春吉邸（明治45年）、西国寺参道西側の通称「蓮華坂」沿道につくられた本格的な数寄屋茶室を持つ宮本春蔵（宗超）邸（大正2年）、天寧寺下に設けられた中尾彦助邸「大好花壇」（現：柳邸／大正初期）、福井英太郎邸（元おのみち文学の館「文学記念室」／東棟：大正元年、西棟：昭和3年）、山城戸の坂道入り口に設けられた稲田伊兵衛邸（現：山城戸荘／明治後期）、などが代表的な茶園として挙げられる。この時期別邸を設けた商人の業種は、呉服商や乾物商、船具卸商、酢・醤油醸造業、肥料商、畳表卸商など、近世末期から近代初期の尾道を支えた主要産業であった。

これらの商人達は、江戸以来尾道に定着しつつあった茶道（藪内流、速水流など）に通じる茶人である場合が多く、この時代に最も茶会が盛んに催されていたことが記録に残されている。[注7・文献8／9]

大藤邸は藪内流十代休々斎竹翠により造園され、[文献7]宮本邸は裏千家家元円能斎宗匠に師事し、京都から迎えられた宮本宗超氏が家元写しの新居を建設したことが記されている。[文献10]

この時期の建築的特徴としては、個々の建物は小規模かつ平屋のものが多く、茶室に加え座敷や縁側など、住宅の要素を持つ数寄屋造へと変化し始めたことと、板ガラスの普及に伴い、海側など特定の面に開口部が大きく取られるようになった点などが挙げられる。

第2期：大正末期から昭和初期にかけての茶園

茶園案内帖（其の壱）に掲載された3つの茶園（みはらし亭、寿楽亭、ガウディハウス）と本号掲載の美原善吉邸（現：クジラ別館／大正12年）はいずれもこの時代に建てられたものである。立地も千光寺、西国寺の山麓だけでなく、東は浄土寺・久保方面から西は三軒家・栗原方面に至るまで、範囲が大きく広がっていった。

この時期の建物は2階建てのものがほとんどで、大広間を持つものや、複雑な屋根伏と平面形態、立体的な空間構成、建具・欄間・床の間・階段に凝らされた意匠など、茶事のための機能よりも、空間や様式の美学をより強く追究した時代であると言えよう。また、明治、大正初期につくられた既存の茶園建築に加えて、洋館や茶室が新たに設けられるなど、新たな建築様式の導入と折衷も進められた。逆に、それまでの多くの茶園に設けられていた蔵は、増改築の際に取り壊されたり、つくられないことも多くなっていった。

3．茶園建築の戦後

線路沿いの建物疎開を除き、空襲被害による環境変化が起きなかった尾道においても、戦後の時期は、茶園の環境を大きく変化させることとなった。その変化のひとつは、茶園の所有が戦前期の所有者とは別の所有者に替わっていったことである。所有者は、造船業や医業など、近代期の業種とは異なる業種が増えていった。二つ目の変化は、別荘建築として建てられた茶園建築が一般住宅や旅館など、当初の目的とは異なる日常用途の建物として使われるようになったことである。三つ目の変化は、1960年代以降、長年保たれてきた茶園の環境が除却、更新されるようなケースが出始めたことである。これらの変化と履歴を経て現在残されている環境、改変された環境、双方の再生が求められている。

■補注

注1　露滴庵は、早くて元禄年間（1688～1703年）、遅くとも享保年間（1716～1735年）には鳥崎園に移築されたと推定されている。文化11年（1814年）に浄土寺に移築されたのち、昭和28年、国の重要文化財に指定された。（文献1、12）

注2　鳥崎園は「芸藩通志」（文献2）に、加島（賀島）園は「芸藩通志」と「賀島記」（尾道市立美術館蔵）他に描かれている。（文献3）

注3　橋本家別邸は、元禄年間から埋め立てられ、天明元年から寛政3年（1781～1791年）にかけて建物が建設された久保新開と呼ばれる、埋め立てによる開発地に隣接する部分に設けられている点で、鳥崎園との共通性がみられる。

注4　青木茂氏旧蔵文書（広島県立文書館所蔵）中にある各種茶事録と、「尾道志稿」（文献4）、「尾道案内」（文献5）などを推定の根拠とした。

注5　この絵図面がおさめられた袋の表書きには、「庚天保11年（1840年）改正　別荘絵図面」とあり、図面には、普請が丁酉（1837年と推定される）六月十五日に始められたと記されている。

注6　朝井柾善、「小西家に伝える鳴子庵の茶園にあった織部灯籠」、尾道文化財春秋第18号、尾道文化財協会、1983年3月より

注7　尾道市史を編纂した青木茂氏旧蔵文書（広島県立文書館所蔵）には、幕末の豪商、天野嘉四郎らによって記録された、幕末（嘉永、文久年間など）から明治の終わりにかけて催された茶事録が多数収録されている。また、橋本家文書には、大正6年に宮本別邸で催された茶事録が残されている。

■尾道の茶園を知るための参考文献

文1　広島県、「重要文化財浄土寺阿弥陀堂・露滴庵及び中門修理工事報告書」、1970年6月

文2　頼杏坪他編、「芸藩通志（復刻版）」、国書刊行会、1981年

文3　八幡浩二（研究代表）、「備後加島園跡―近世町人文化遺跡の基礎的研究―」、福武学術文化振興財団活動支援助成報告書、2008年3月

文4　亀山士鋼、「尾道志稿」、得能正通編、『備後叢書（復刻版）第5巻』、歴史図書社、1970年

文5　吉田松太郎、「尾道案内」、中国実業遊覧案内社、1915年

文6　高橋蓉庵編、「東都茶会記　第5輯下」、慶文堂書店、1920年

文7　青木茂編、「新修尾道市史　第6巻」、1977年2月

文8　朝井柾善、「尾道と茶の湯」、尾道文化財春秋第13号、尾道文化財協会、1977年5月

文9　井上秀二、「速水流茶道と備前・備中・備後の門人たち」、『岡山理科大学紀要』、1994年

文10　井上秀二、「幕末から明治における尾道の茶の湯―藪内流茶道と速水流茶道―」、『雪月花―50年をいしずえに―』、（社）茶道裏千家淡交会尾道支部、1999年

文11　山根宗重、「尾道における裏千家茶道史」、『雪月花―50年をいしずえに―』、（社）茶道裏千家淡交会尾道支部、1999年

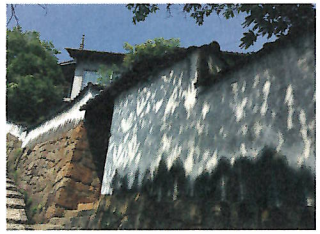
文12　尾道市市史編さん委員会編、「新尾道市史　文化財編　上巻」、2019年

▲柳邸からの尾道水道の眺望

柳邸（旧中尾彦助氏別荘）

尾道市東土堂町
木造2階建て

▼（左から）矢羽根張りの戸袋／補修された漆喰の塀／杉皮が張られた外壁／自然木の持ち送りと高欄／深い庇と化粧垂木袋



来歴と環境の概要

この建物は、江戸期から本通り・十四日町において「栗彦」の商号で呉服商を営み、株式会社尾道魚市場の社長を務めた中尾彦助氏の別荘である。中尾彦助氏は明治期尾道の代表的茶人の一人として「中尾彦助茶事控（明治17年～28年）等の記録を残している。[注]

本別荘は、天寧寺本堂東側から天寧寺三重塔へと上っていく、曲がりくねった坂道に面して立地する茶園建築群のひとつで、この周辺は明治期、千光寺南斜面で最も早く宅地として開けた場所である。本邸以外にも、阪井善兵衛邸（大鍛冶屋）、宮邊源助邸（海産物商）、寺岡庄次郎邸（呉服商）、倉田新助邸（船具商）などの別荘が大正初期にかけて次々と建設された。大正4年に中国実業案内社から発行された「尾道案内」においても、主な茶園として「中尾彦助君別荘（土堂町天寧寺上）」の記述が見られ、魚市場前にあった料理旅館「大好本店」の別館「大好花壇」としても使われ、茶室・庭園の写真が掲載されている。現在の庭園にも大小の燈籠や蹲、池、石組み、植栽、茶室に向かう路地の遺構などが大正時代の写真とほぼ同じ状態で現存している。

注）井上秀二氏の記した文献「速水流茶道と備前・備中・備後の門人たち」（岡山理科大学紀要、1994年）によると、「明治38年、尾道市中尾別邸において、速水流四代、宗汲氏が門人の天野嘉四郎他22名を招いて還暦祝賀会を催している」と記載されている。

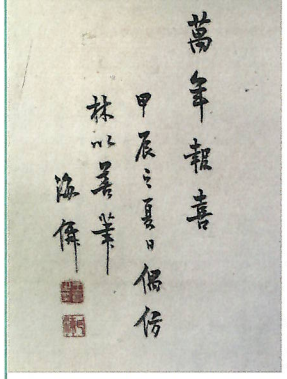
建築的特徴

この建物は、寺めぐりルート上、天寧寺塔婆から艮神社に至る石畳の小道に面し、またロープウェーから望見できる斜面地に、南北に妻を向ける形で建築されている。北側の瓦葺きが当初の建物であり、南側にほぼ同規模の戦後の増築部分が一体で並ぶ。東側の石段の小道側には石垣の上に瓦葺き小屋根を載せた漆喰塗りの塀が斜面に沿って立ち、中央に腕木の門を備える。門は瓦葺きで、竹木舞で杉皮を留める風雅な数寄屋尽くしの仕上げである。

1階の下屋も手の込んだ細工が見られ、隅柱および直交する縁桁はすべて磨き丸太による「捻組（ねじぐ）み」の加工を施し、垂木も丸太で組むなど、高度な技術が見られる。縁桁以外の垂木・木舞・野地板・土・風の造りで、寺めぐりルート上の重要な景観のポイントとなっている。建設当初の主屋は、木造2階建て切妻造りで、東側に下屋付きの縁を廻す。外壁の杉皮張りの破損や開口部のアルミサッシへの改造などが見られるものの、ほぼ原形を残す。

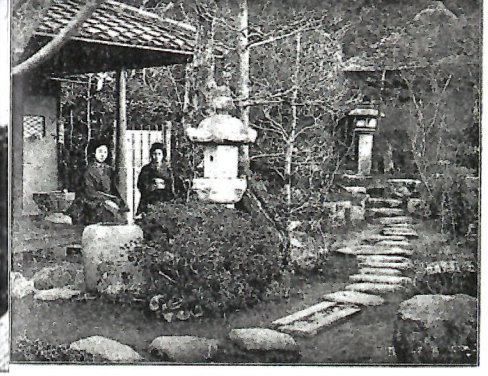
北側にはT型に突出した旧便所や深い下屋、石端建ての束などが印象的な外観をつくりあげている。また2階のキリヨケ庇の垂木は磨き丸太と竹を交互に配り、桁はサビ丸太とする。窓の手すり等は名栗仕上げで貫は竹、持ち送りには自然木が用いられている。

2017年度尾道市まちなみ形成事業による外観補修を実施した。腐朽が進行していた庇の谷部分、雨樋、外壁および漆喰の塀を修復するとともに、自費で旧茶室と山側の軸部の補強を行った。



◀襖には「甲辰（きのえたつ）」の銘がある。明治以降ならば1904（明治37）年にあたる。少なくとも建具は百余年の歴史が明確となっている。

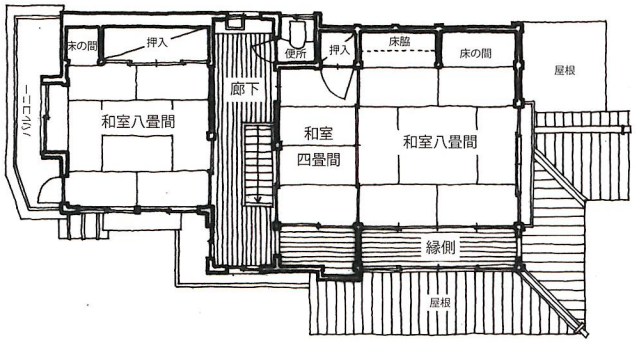
▶大正初期の天寧寺周辺の景観（「大典記念尾道公園の設計（1915）」より）



中尾彦助君別荘
大好花檀

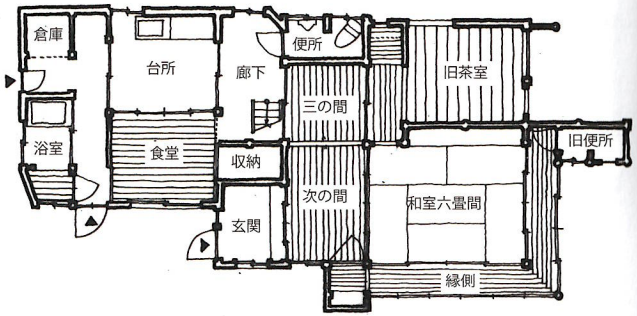
▲大好花壇と呼ばれた庭園と茶室（「尾道案内（1915）」より）

左写真と同アングルで撮影。石灯籠などはそのまま▲



▲2階平面図

▼1階平面図

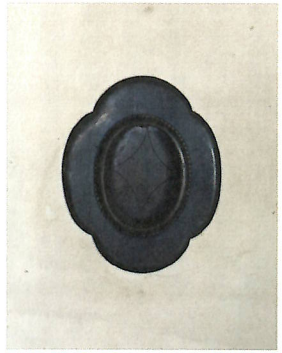


図面中央から左部分は増築。ここに台所や浴室の機能を新設していた。

▼縁側の化粧垂木と縁桁

▼2階の座敷

▼2階の座敷



茶園ならではのしつらえ、意匠を発見するのも楽しみのひとつ。ユニークな形の襖の引手や松に止まるカササギを描いた襖絵も美しい。円窓には掛け障子、竹を曲げた変わり組子、笠木にナグリの材を用いた高欄もアクセントになっている。

オーナーより ひとこと

柳幸典

「尾道らしい坂の上に、素敵な別荘があれば……」

私たちは百島という離島でアートの活動しているので、本土側のレジデンスが欲しいと思っていたのです。そんな時に、知り合いのご縁であの家と出会いました。そして尾道市のまちなみ形成事業も利用して再生を始めました。

東京から来たゲストを泊めるだけでなく、僕たち自身も尾道で飲んで島に帰れなくなった夜に泊まったりしています。酔った体であの坂道を登るのはつらいものがあるのですが、それでも朝起きた時の尾道水道の風景は気持ちが良い。草むしりや構造の補修など、大変な作業はまだ続きますが、大切に使っていきたいと思っています。【談／渡邉まとめ】

尾道茶園案内帖　其の弐
令和2年3月発行
NPO法人尾道空き家再生プロジェクト